

学生実習支援センター 助手 徳山 友紀

7月27日（日）本学A22実習室にて、市民組織「山科区『はぐくみ』ネットワーク実行委員会」と共に、理科実験講座「身近な夏の不思議体験 2025 イン山科」を開催しました。地域の小学生に理科の楽しさを知ってもらいたいと始まった本講座は今年で14回目を迎え、山科区の小学生にとって夏の恒例行事になっています。

当日は抽選で選ばれた山科区の小学生94名が参加し、学生実習支援センター教員と企画・広報課職員のほか、市民組織の方々が地域ボランティアスタッフとして運営に携わりました。スタッフのサポートのもと、白衣に身を包んだ子どもたちが「水」をテーマとした2つの実験を通して身近な科学の不思議を体験しました。

1つ目の実験「手でつまんで持てる水！容器がいらない水を作ろう」では、昆布やワカメの食物繊維である「アルギン酸」を用いて、水ボールを作製してもらいました。アルギン酸水溶液はカルシウムと反応すると溶液の表面がゲル状に変化し、薄い膜ができることでつまんで持てるようになります。「水がつまめた！」、「ぷにぷにしてる！」と嬉しそうに見せてくれる姿や、夢中になって取り組んでいる姿が印象的でした。



うまくできるかな？



水ボールができました！

2つ目の実験「水が消えた！？水を吸う魔法の粉」は携帯用トイレから取り出した「高吸水性ポリマー」を用いて、吸水性や保水性を観察した後、着色したポリマーでカラフルな手作り芳香剤を作ってもらいました。わずかな量でその何倍もの水を吸収し膨らむ様子や、力をかけても吸収した水を離さない様子を観察し、「もこもこ膨らんできた！」、「押しても水が出てこない！」など子どもたちから感嘆の声が聞こえてきました。



集中して実験に取り組んでいます



カラフルな芳香剤ができました

実験終了後のアンケートでは、「参加してみて、理科がとても好きになりました。参加してみてよかったです。」、「ますます理科が好きになりました。楽しかったです。また参加したいです。」などの感想が寄せられました。今年度も参加した子どもたちに理科の

楽しさを感じてもらえたことをとても嬉しく思います。また、「家ではあまりできない体験ができて、おもしろく、楽しかったです。理科がもっとおもしろくなったので、夏休みの自由研究にもやってみようと思いました。」、「とても楽しかったので、来年も参加したいし、家でも実験してみたいと思った。」など家でもやってみたいという声もあり、理科への興味喚起およびその継続のきっかけにもなったと感じています。



水の不思議に興味津々です

最後に、講座の実施にあたり、23名の地域ボランティアスタッフにご協力いただき、各実験台にて子どもたちの実験をきめ細かくサポートしていただきました。子どもたちがリラックスして実験を楽しめる雰囲気ができているのは地域ボランティアスタッフの方々のご尽力のおかげだと思っております。この場を借りて市民組織「山科区『はぐくみ』ネットワーク実行委員会」の皆様深く感謝申し上げます。



地域ボランティアスタッフのサポートは欠かせません

今後も地域に根差した大学の役割として、近隣学区の小学生の理科教育の一助となれるよう、市民組織と共にこの取り組みを継続していきたいと考えています。なお、本講座は独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受けて実施いたしました。